定的な印象はない」－「会話をする際の適当な頭の位置である」。

10. 視線「異常にほとんど相手を見ない」「異常にしばしば相手を見る」－「ほとんど相手の方を見ず否定的な印象を与える」「かなり相手の方を見すぎる傾向にあり否定的な印象を与える」－「見ることを避けようとする傾向にあるが、否定的な印象はない」－「正常に相手の方を見て話している」

以上10項目を4点尺度で評定を求めた。

また、二者間での10分間の会話終了後、それぞれの被験者に対して、会話中の自分自身の行動と、相手の行動についての評定を求めた。質問項目は次の12項目を用い、ほとんどしなかった（1点）～しばしばした（3点）の3点尺度で評定を求めた。（1．相手の気持ちを引き立てるように振舞った。2．雰囲気を和らげるように振舞った。3．相手の話の腰を折った。4．相手の言うことになんでも反対した。5．相手に指示を与えた。6．二人の意見をまとめた。7．相手に冷静な態度で接した。8．よく考えてから発言した。9．相手にしらけた態度を示した。10．その場の雰囲気にそぐわない振舞いをした。11．相手の意見を聞いてから発言した。12．相手の意見に従った。）

Ⅲ．結果

1．言語的行動の観察者評定

言語的行動の評定に関する結果は表1．に示した。尚、評定者間の一致係数は、$r=.92$（$df=12$, $p<.005$）であった。各従属変数ごとに、高類似群と低類似群とで t 検定を行った。「自分の言い分、考えを述べている」（t（4）＝9.53）、「相手に質問をしている」（t（4）＝5.09）、で有意差が認められた。これらの結果から、高類似群は低類似群よりも、自分の言い分考えを述べている（高・M＝9.19、低・M＝7.76）。さらに、相手に質問をしている（高・M＝8.57、低・M＝7.38）ことが明らかになった。

2．非言語的行動の観察者評定

非言語的行動の評定に関する結果は表2．に示した。尚、評定者間の一致係数は、$r=.50$（$df=12$, $p<.05$）であった。各従属変数ごとに、高類似群と低類似群とで t 検定を行った。その結果「姿勢の後傾傾向」（t（4）＝3.29）、さらに「体の向き」（t（4）＝2.92）で有意差が認められた。高類似群は、低類似群よりも、、姿勢の後傾傾向で（高・M＝7.75、低・M＝6.62）と姿勢の適切さが高く、体の向き（高・M＝7.76、低・M＝6.57）でも適切さが高いことが明らかになった。

3．被験者の自己報告

表1．類似性の高低別にみた言語的行動の平均と標準偏差

	高類似群	低類似群	t 値	有意水準
1．自分の気持ちを素直に表している	9.47 (1.76)	8.48 (2.22)	1.05	*n.s.*
2．自分の経験を述べている	9.57 (1.29)	8.19 (2.32)	1.65	*n.s.*
3．自分の言い分、考えを述べている	9.19 (1.89)	7.76 (2.27)	9.53	.01
4．積極的に会話に参加している	9.71 (2.00)	8,57 (2.28)	1.36	*n.s.*
5．相手に質問をしている	8.57 (1.71)	7.38 (1.43)	5.09	.05
6．相手の陳述に対してコメントや反応をしている	9.33 (1.61)	9.05 (1.73)	0.48	*n.s.*
7．相手に対して同意の表現がみられる	9.05 (1.62)	8.38 (1.94)	0.77	*n.s.*
8．相手に対して否定的である	3.10 (1.44)	4.04 (1.83)	−1.32	*n.s.*

注）$df=4$,　質問8．は逆転項目